

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:30 ~ 15:50

[健康福祉-B-01]

高校までの運動部活動・スポーツクラブの活動経験がPhysical Literacyの身体的領域に及ぼす影響（発,測）

*小坪 朋夏¹、春日 晃章² (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

15:50 ~ 16:10

[健康福祉-B-02]

未就学児から学童期までの運動プログラムの開発（発,測,コ）

運動観察記述法に着目して

*藪内 正樹¹ (1. C3pro株式会社 Happy Core Smile)

16:10 ~ 16:30

[健康福祉-B-03]

幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響（発）

*秋武 寛¹、三村 寛一² (1. 西南学院大学 人間科学部 児童教育学科、2. 滋慶医療科学大学 医療管理学研究科)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:30 ~ 15:50

[健康福祉-B-01] 高校までの運動部活動・スポーツクラブの活動経験がPhysical Literacyの身体的領域に及ぼす影響（発,測）

*小坪 朋夏¹、春日 晃章² (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

本研究は、高校までの運動部活動・スポーツクラブ（SC）の活動経験がPhysical Literacy（PL）の身体的領域に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

対象は、G県の公立高等学校に通う男子407名、女子303名とした。PLの測定は、日本版PL評価法を使用した。質問紙は、身体的領域13項目で構成され、5件法で回答を得、得点化した。運動部活動・SCの活動経験は、中学及び高校の部活動・クラブ活動について、個人競技、集団競技、芸術、無所属で回答を得、中学・高校ともに個人競技の群を「個人群」、集団競技の群を「集団群」、芸術及び無所属の群を「非運動部群」の3群に区分し分析に用いた。本研究では、中学・高校期に異なる種類の部活動に所属している生徒は対象から除いた。性別及び運動部活動・SCの活動経験の違いによるPLの差を検討するため、対応のない二要因分散分析を適用した。また、有意な主効果が認められた場合には、多重比較検定を行うとともに効果量を算出した。

分析の結果、全身持久力、スピードに関する設問において有意な交互作用が認められた。多重比較検定の結果、両設問とも、男子では、個人群が非運動部群より、集団群が個人群、非運動部群より有意に高かった。女子では、個人群、集団群が非運動部群より有意に高かった。集団群では、男子が女子より有意に高かった。運動部活動・SCに関して、身体的なリズム感に関する設問以外の設問において有意な主効果が認められた。多重比較検定の結果、およそ全ての設問において、個人群、集団群が非運動部群より有意に高かった。また、6項目において、集団群が個人群より有意に高かった。中高生期に継続して運動部活動・SCに所属している生徒は、そうでない生徒よりも高い身体能力を有すると推測され、競技に求められる運動能力によって、得意とする体力特性に違いがあると考えられる。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:50 ~ 16:10

[健康福祉-B-02] 未就学児から学童期までの運動プログラムの開発（発,測,コ）
運動観察記述法に着目して

*藪内 正樹¹ (1. C3pro株式会社 Happy Core Smile)

現在、未就学児から学童期までの運動プログラムやトレーニング法の開発が様々に展開されているが定型発達にこだわりすぎるという問題点がある。そのため発達の個人差が十分に考慮されず、できる・できないの二分法的な評価になりやすく、特別支援が必要な子供たちへの配慮が不十分なものとなる傾向があり、その結果、子供達自身の主体性や創造性が抑制的に捉えられ、指導者の視野が狭くなるなどという問題点が一般的に指摘されている。

本研究では、自立するまでの動き、その後の匍匐、つかまり立ちや自立歩行などの移動の動き、体幹の動き、四肢や頭部の動きとの連動性に注目し、この動きを豊かにすることを狙いとした運動観察と指導の在り方を考察する。そこに注目する理由は、その後の発達のための基礎ないしは背景に気づき、発達支援の取り組みもたえずこの点に立ち戻りつつ進められなくてはならないと考えたからである。筆者らの取り組みは、「今できる体幹・四肢・頭部の動き」に着目し、その組み合わせやバリエーションを楽しみ広げることによって（分化と再生）、からだの面だけではなく非認知能力を含むこころの面の発達の現在値を豊かにする、質の高い運動環境の提供をねらいとしている。こどもたちの多様な移動運動（手足のクロールリング、はいはい、ずりばい、つかまり立ち、左右支持足の交代、歩動作、など）に着目し、1. 体幹の動きを中心とした、四肢・頭部の動きとの連動性をたかめる協調運動の観察評価、2. 主動作に対する準備的な導出動作（反動動作）の機能性をたかめる協調運動の観察評価、3. 動作の緊張と弛緩の流れや調和をたかめる協調運動の観察評価を提案する。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

16:10 ~ 16:30

[健康福祉-B-03] 幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響（発）

*秋武 寛¹、三村 寛一² (1. 西南学院大学 人間科学部 児童教育学科、2. 滋慶医療科学大学 医療管理学研究科)

【背景】幼児の扁平足と運動能力との関係において扁平足の幼児は、運動能力が低いとする報告もあれば、両者に関係は認められなかったとする報告もある。しかしながら幼児の身体活動量が、足部舟状骨高に及ぼす影響について明らかにされていない。【目的】本研究は、幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響について検討することを目的とした。【方法】対象は、4歳から5歳の幼児74名(男児32名、女児42名)であった。日常の身体活動量の測定は、3軸方向の加速度計であるActiGraph wGT3X-BT (4.6×3.3×1.5cm, 19g) を用いた。加速度計は、入浴、水泳を除いて右腰部に装着して専用のベルトに固定し24時間一週間連続して測定した。日常の身体活動量は、先行研究を基に歩数（以下SC）、座位行動、低強度身体活動、中強度身体活動（以下MPA）、中高強度身体活動（以下MVPA）、高強度身体活動を分析した。足部形状の測定は、三次元足形計測装置INFOOT 2を用いて測定した。INFOOT 2は、ヒトの足の形状とその解剖学的寸法を計測する光学三次元計測機器であった。対象には、足部の解剖学的計測点に基づき、舟状骨下端に測定機器の製造会社が推奨している直径5mmのランドマークを貼付した。左右対称性指数は、Symmetry index (SI)として算出した。SI= (右足舟状骨高-左足舟状骨高) / (右足舟状骨高+左足舟状骨高×0.5) 【結果および考察】日常の身体活動量は、足部舟状骨高に関係が認められなかった。しかしながら平日の歩数、全日および平日のMPA、全日および平日のMVPAは、足部舟状骨高の左右差に負の相関関係が認められた($p<0.05-0.01$)。以上のことより、幼児の日常の身体活動量は、足部舟状骨高の左右差が小さくなる可能性が示唆された。